大河ドラマ脚本➀

「龍の時代」理世安民の旗幟編

　　　　　　　　　　　　　　　　三日木　人

大河ドラマ脚本➀「龍の時代」理世安民の旗幟編■登場人物（すべて数え年）

　三好長慶（三十二歳）　　戦国初の天下人、幕府御供衆、筑前守、孫次郎

　足利義輝（十八歳）　　　室町幕府十三代将軍

　細川晴元（四十歳）　　　幕府管領職（のちに心月と号す）

　細川氏綱（四十歳）　　　晴元に代わって細川京兆家を継ぎ、管領職就任

　細川藤孝（二十歳）　　　義輝側近、兵部大輔（のちに幽斎と号す）

　六角定頼（五十八歳歿）　近江守護（江雲と号す）

　六角義賢（三十三歳）　　定頼の後継、近江守護（のちに承禎と号す）

　松永久秀（四十六歳）　　三好長慶の腹心、弾正忠に叙任

　三好長逸（不明）　　　　三好一門の長老的存在、日向守

　今村慶満（不明）　　　　細川氏綱の被官、三好軍に与力として参陣

　松田監物（不明）　　　　東山・霊山城の城将

　芥川孫十郎（不明）　　　芥川山城主、三好一族でありながら長慶に謀叛

　足利義輝近習Ａ

　足利義輝近習Ｂ

　足利義輝近習Ｃ

　松田監物家臣Ａ

　芥川孫十郎家臣Ａ

大河ドラマ脚本➀「龍の時代」理世安民の旗幟編（本編40分）

■場面テーマ【三好長慶、理世安民の旗を掲げて上洛し、八坂の塔に翻す】

■梗概（あらすじ）

　天文二十一年（一五五二）正月二日、近江守護であり、足利幕府の後ろ楯となっていた六角定頼（江雲）が、五十八歳で病没した。

　六角定頼の嫡男・義賢（のちの承禎）は、父定頼の遺命に従い、反目していた将軍足利義輝と三好長慶との間を取り持ち、和睦へとこぎつけた。

　これより二年前の天文十九年、足利義輝は中尾城（京都左京区）に籠って、管領細川晴元（のちの心月）とともに、政権奪回をめざして、三好長慶に合戦を挑んだものの、あえなく近江坂本に敗走し、その後、近江の豪族朽木稙綱を頼って、山間の朽木谷へと落ち延びていた。

　六角義賢を介して、三好長慶と和睦した足利義輝は、天文二十一年正月二十八日、亡命地の近江から帰洛を果たした。

　その和睦の主たる条件は、細川晴元を管領職から追い、代わりに三好長慶が擁立している典厩家の細川氏綱を細川京兆家の後継とし、管領職に任じるというものであった。

　しかし、和睦からわずか二カ月後の同年三月八日、若狭に落ち延びていた細川晴元とともに、足利義輝が山城の霊山城（東山区）に籠って、再び反長慶の兵を挙げたのだ。

　これに呼応するかのように、三好一族であり、長慶の妹婿でもある芥川孫十郎らが、丹波の波多野勢に味方して、長慶に叛旗をひるがえした。

　七月に入り、長慶はわが身にふりかかる火の粉を払うべく、芥川山城に籠って敵対した芥川孫十郎の成敗に取りかかった。

　その芥川山城攻めの陣中に急報が入った。

　聞けば、細川晴元率いる丹波勢一千余が洛中に押し入り、三好長慶や松永久秀の京屋敷を焼き討ちにしているという。しかも、三好軍の京都の拠点である通称・西の城（西院城・右京区）を攻撃しているというのだ。

　長慶は王城の地である京の騒擾を鎮撫すべく、ただちに芥川山城の攻撃を中止し、河内・和泉・摂津・紀伊からの援軍を加えた二万五千余の大軍を率いて上洛の途についた。

　その軍の先頭に掲げられたのは、「理世安民」の旗印であった。道理をもって世を治め、民心を安んずる――それは、天下静謐をめざす長慶の意志を示した大義の旗であった。

　三好長慶が上洛するや、将軍義輝と細川六郎は戦わずして逃奔した。

　長慶は、理世安民の旗幟を、東山の法観寺五重塔、すなわち「八坂の塔」に掲げさせた。ときに長慶三十二歳。事実上の天下人として、将軍ぬきの「三好政権」の樹立をめざした大義の旗幟が、長慶の大いなる志として高々と翻ったのである。

大河ドラマ脚本➀「龍の時代」理世安民の旗幟編（本編40分）

■場面テーマ【三好長慶、理世安民の旗を掲げて上洛し、八坂の塔に翻す】

〇戦国時代、朽木稙綱の城館（岩神館）の庭

　　　◎テロップ

　　　天文二十一年（一五五二）一月

　　　近江・朽木谷

　　　山間の朽木谷にある城館、その庭で将軍足利義輝が側近衆を相手に剣術稽古に励む。

　　　木剣を持つ義輝は片肌脱ぎ、袴の股立ちを取り、側近衆は小袖姿にたすき掛け。

ナレーション「時は天文二十一年正月。三好長慶との戦いに敗れた将軍足利義輝は、京の

　都から逃れ、近江湖西の豪族朽木稙綱の城館に身を寄せ、反撃の機会を狙っていた」

　　　◎テロップ

　　　将軍・足利義輝

義輝「きええええーいッ」

側近「おうっ」

　　　対する二人、額に汗を浮かべて木剣をふるう。他に側近衆三名、片膝付きで控える。

　　　そこへ、側近の細川藤孝、肩衣・袴姿で現れ、片膝付きで注進に及ぶ。

　　　◎テロップ

　　　将軍側近・細川藤孝

藤孝「大樹、一大事にございます」

義輝「いかがした？」

藤孝「ただいま早馬が参り、江雲どの、見罷られたのこと」

義輝「なにっ！　六角の爺が死んだとな」

藤孝「御意」

　　　義輝、驚愕の表情を浮かべ、木剣を力なく地に落とす。木剣、乾いた音を立てる。

ナレーション「江雲とは、近江守護・六角定頼のことで、定頼は義輝の大きな後ろ楯とな

　っていた。義輝はこの定頼らの武力を背景に、京都奪回をめざしていた。定頼は義輝元

　服の折、加冠役をつとめた烏帽子親でもある」

〇（回想）近江坂本の日吉神社社殿内

　　　義輝、六年前の元服式シーン。義輝に烏帽子をかぶらせ、頬笑む大紋姿の六角定頼。

　　　その傍らで祠官、見守る（回想終わり）。

義輝「余は捲土重来を期し、このように武芸に励み、心胆を練っておる。いずれ三好軍を

　討ち破って京の都に戻り、将軍として天下に君臨せねばならぬ。なのに、六角の爺は、

　余を置き去るように逝ってしもうた」

　　　と、義輝、唇を噛み、空を見上げる。山間の朽木に、青い空が虚しくひろがる。

ナレーション「その二日後、朽木谷に逼塞する義輝のもとに、一人の若武者が訪れた。今

　は亡き六角定頼の嫡男、四郎義賢である」

〇城館（岩神館）の仮御所内（早朝）

　　　馬のいななき声がする。直後、仮御所内の廊下に六角四郎義賢の姿が現れる。

　　　四郎義賢、隅立て四つ目結の大紋打った素襖・袴姿で、義輝御座所へと歩を進める。

　　　義輝、御殿の上段の間に座す。

　　　左右に管領の細川晴元、細川藤孝ら近習が居並ぶ前で、六角四郎義賢ぬかづく。

　　　◎各人の名前のテロップ

義輝「義賢、大儀。そちの父・江雲がこと、病とはかねがね聞いておったが、此度、突然

　の訃報を聞き、言葉もない。三好征伐の軍を興す際には、わが烏帽子親であり、将軍家

　後見役とも申すべき江雲を恃みにしておったのに、かえすがえすも残念じゃ」

義賢「かたじけなきお言葉。恐縮至極に存じまする」

義輝「葬儀には余も列しようぞ。今後はそちが六角の家を継ぎ、余をしかと支えよ」

義賢「ははッ」

　　　義賢、さらに身を低くする。

義輝「六角の爺は、余によう尽くしてくれた。何か言い遺したことはあるか？」

義賢「はッ、いささか申し上げ難きことながら……」

義輝「構わぬ。申せ」

　　　義賢、面を上げて言上する。

義賢「いまわの際まで、大樹を京の都にと譫言のように申しておりました。そのために、

　わが六角の総力を挙げて、粉骨砕身尽くすべしと……なれど、大樹に京の都にお戻りい

　ただくには、和睦の道を探るしかあるまいとも……」

義輝「ふむ。京に帰りたいのは、やまやまじゃが、いまや三好筑前守が京の主として、我が物顔にふるまっておる。今や天下を掌中におさめようとしておる筑前めが、ここに至りて和睦に承知するとは到底思えぬ。帰洛など、夢のまた夢よ」

ナレーション「三好筑前守とは、三好長慶のことである」

義賢「大樹、その儀、この四郎義賢めにお任せいただけましょうや」

　　　義輝、大きく目をみはり、義賢を見る。

義輝「そなた、もしや、よき思案があると申すか」

義賢「ここは思案というより、ご堪忍が大切と心得まする。三好長慶どのも人の子。鬼や

　蛇ではございませぬ。噂では、理非をわきまえた物分かりのよい御仁とも聞きまする。

　長慶どのの言い分も聞き、彼の者の申す条件に、じっくり耳を傾ければ、結果はおのず

　と出てまいりましょう」

　　　すると、義輝側近の細川藤孝、思わず気色ばみ、横から口をはさむ。

藤孝「大樹に膝を屈せよ、筑前に譲歩せよ、と申されるか。無礼であろう」

　　　義賢、藤孝に向き直り、臆せず主張する。

義賢「いまや三好軍は五万の大軍に膨れあがり、武力では太刀打ちできませぬ。となれば、

　和睦以外に京に帰る方策がございましょうや。幕府がこのままの体たらくでは、いずれ

　朝廷からも軽んじられましょう。その前に帰洛を果たし、将軍家の威光を取り戻さねば

　なりませぬ。和睦も策戦のうち。嘘も方便と申します」

　　　義輝の脇に侍る細川六郎晴元、ヒステリックに反対する。

晴元「ならぬ、ならぬっ。和睦など何があってもならぬ。戦って、憎き三好長慶の首を刎

　ね、帰洛を果たすことこそ王道。和睦など断じてならぬっ」

　　　その晴元の言葉に対して、義輝、脇息を叩いて大声を上げる。

　義輝「だまれっ、だまれ。将軍である余がこんな草深い朽木谷におるのは、いったい誰

　のせいじゃ。それもこれも管領たるそちが、無能であったゆえのことよ。余はこんな侘

　しい片田舎での生活は我慢できぬ。和議じゃ。和睦じゃ。この際、まずは京に帰り、だ

　れが天下の大将軍かを筑前守にわからせることが肝要である。和睦の上、征夷大将軍で

　ある余の前に、筑前守を這いつくばらせるのじゃ。臣下の礼を取らせるのじゃ」

　　　これを聞き、細川晴元、苦虫を噛みつぶす。

　　　細川藤孝、晴元のほうへ向き直り、きっぱりと申し渡す。

藤孝「大樹の仰せ、ごもっとも。もはや和議が主命なれば、これ以上のご異存はなりませ

　ぬ。まして、和議に異を唱え、兵を挙げるなど論外。爾後、言動を慎まれるがよかろう」

ナレーション「かくして、六角義賢の奔走により、足利義輝と三好長慶は和議を結んだ。

　その主な条件は、管領細川晴元を隠居させ、三好長慶が擁立している典厩家の細川氏綱

　を管領職に就けるというものであった。和睦後、足利義輝は晴れて帰洛を果たし、三好

　長慶は、御供衆に加えられ、将軍直臣の身分となった。一方、管領職をはずされた細川

　晴元は、復讐を誓って若狭の武田氏を頼って落ち延びた」

〇摂津・越水城の客殿（夜）

　　　◎テロップ

　　　摂津・越水城

　　　桜散る庭に篝火が焚かれている。その篝火に赧々と照らされた舞台の上で、能が演

　　　じられている。

　　　庭に面した客殿から舞台の能を鑑賞する三好長慶と新管領・細川氏綱を中心に、そ

　　　の左右には、三好長逸、松永久秀ら重臣が居流れる。

　　　◎各人の名前のテロップ

ナレーション「天文二十一年三月、三好長慶の居城、越水城内で、新しく管領職に就いた

　細川氏綱を迎えて、盛大な祝宴が催された」

氏綱「筑前どの、観世小次郎の舞、いつ目にしても見事じゃのう。今日この日、桜花も舞

　い、まさにわが世の春とも申すべき心地じゃ」

長慶「ははッ。管領職ご就任、まことに祝着至極。細川家を氏綱さまが継ぎ、幕府管領となられたことで、天下もよいほうへ向かいましょう」

氏綱「そなたも幕府御供衆の列に加わり、めでたいことよ。これからは、管領たる身共と

　手を携えて幕政の改革に取り組み、そなたの申す理世安民の世をつくりたいものじゃ」

長慶「かたじけないお言葉、痛み入りまする」

氏綱「そうじゃ！　今後、上洛の折などには、その理世安民の志を大書きした旗幟を軍の

　先頭にひるがえしてはどうじゃ。理世安民の旗幟、よいではないか。まさに大義の旗印

　となろう。のう、弾正、そう思わぬか」

　　　と、三好長慶の隣に座す松永久秀に話をふる。

　　　久秀、その場に拝跪し、氏綱に言葉を返す。

久秀「御意。さすれば、わがお屋形さまの志は、天下に知れわたりましょう。まさに名案

　かと存じまする」

氏綱「では、早速、理世安民の旗幟を調えよ。いつ上洛の機会が訪れるやもしれぬでのう」

久秀「と、申されますと……」

氏綱「ふふっ。弾正、とぼけるでないわ。前の管領たる晴元めが、若狭に落ち延びたとき、

　そちは忍びの者を若狭に潜り込ませ、彼の者の動向を探っておるではないか。いずれ、

　晴元めは反撃の兵を糾合し、かつ京の都に攻めのぼってくることは必定。そうした諸々

　のこと、そちが予見できぬはずもなかろう」

　　　久秀、頭を掻く。

久秀「これは、一本取られ申した」

　　　そこへ、小姓が近づき、長慶に耳打ちする。

　　　長慶、顔をしかめる。

氏綱「筑前どの、いかがなされた」

長慶「丹波の波多野晴通が、八上城に籠り、われら三好に叛旗をひるがえしたとのことに

　ございます」

氏綱「おらく晴元めの差し金であろう。丹波守護のあやつが、守護代の波多野晴通と共謀してのこと。それにしても、晴元めはしつこいのう。まさに権力欲に取りつかれた復讐の亡者。長慶どのに管領職を追われたことが、よほど口惜しいとみえる。むふふっ」

ナレーション「若狭へと落ち延びた元管領の晴元は、この頃、丹波の波多野晴通だけでな

　く、摂津の芥川孫十郎にも長慶への謀叛をそそのかしていた。芥川孫十郎は、三好一族

　の者であり、長慶の妹婿でもあったが、晴元から莫大な恩賞をちらつかされていた」

〇摂津・芥川山城の陣（早暁）

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）

　　　摂津・芥川山城

　　　芥川山城の麓に霧が流れる。

　　　軍馬がいななき、陣鼓、陣鉦が鳴り響く。喊声が湧き立つ。

ナレーション「天文二十二年夏、芥川孫十郎は、三好一族の者でありながら、ついに義理

　の兄である三好長慶に叛旗をひるがえした。三好長慶は孫十郎を成敗すべく、居城の芥

　川山城を攻めた。しかし、この山城は難攻不落の要害であった」

〇芥川山城の麓・三好軍

　　　副将の松永久秀、三好軍の先頭に立ち、兵を鼓舞する。

　　　しかし、芥川山城は天然の要害に加え、三好軍の前方からは矢玉の雨が降り注いだ。

久秀「ひるむなッ。かかれ、かかれいッ」

　　　三好軍、鬨の声をあげて吶喊す。そのとき、一発の銃声。

久秀「うっ」

　　　久秀の左肩に銃弾が当たり、久秀、右手で肩をおさえ、呻く。

側近「弾正さま！」

久秀「かすり傷じゃ。大事ない」

側近「なれど、まずは傷のお手当を。ここはひとまず退却いたしましょうぞ」

久秀「うっ、うむ。やむをえぬ。退却じゃ」

側近「ひけ、ひけっ、本陣まで退却じゃ！」

〇芥川山城麓・三好軍の本陣

　　　本陣幔幕内にて、総帥・三好長慶を中心に、長老格の三好長逸、松永久秀ら重臣が

　　　軍議を凝らす。全員、小具足姿。

　　　◎テロップ

　　　三好日向守長逸

長逸「弾正どの。肩の傷は大事ないか」

　　　久秀、左肩に手を当てて返答する。

久秀「なんのこれしき。それにしても、聞きしにまさる堅城。なかなか落ちませぬ。お屋

　形さま。この上は兵を増強して攻めるに如かず」

長慶「うむ」

　　　と、長慶、眉根に皺を寄せてうなずく。

ナレーション「以後も、叛旗をひるがえした芥川山城を果敢に攻めること二十日余り。し

　かし、三好軍は難攻不落のこの城を攻めあぐねていた。そこへ、京の都から早馬がもた

　らされた」

急使「一大事にございます。京の三好館などが焼き討ちされ、わがほうの西の城、攻撃を受けております」

ナレーション「西の城とは、京の都にある三好軍の拠点である。西院城とも呼ばれ、当時、

　洛中では唯一の城郭であった」

　　　急使からの注進を受け、長慶が眉をひそめて問い返す。

長慶「して、敵は何者なるぞ？　その兵数は？」

急使「元管領、細川晴元軍、一千余。これに、呼応して、公方さまも霊山城に立て籠り、

　わがほうに敵対の構え！」

長慶「ううむッ」

　　　長慶、目を閉じて腕組みをする。

久秀「お屋形さま。西の城が落とされては一大事。われら京の拠点を失いまする」

長逸「義輝公は、それにしても節操のない御仁よ。前年、われらと和睦を結んだばかりで

　はないか」

　　　長慶、目を見開き、決断する。

長慶「急ぎ、京へ参る」

長逸「やれやれ、乱世とは申せ、叛服常なし。前年の和睦も、所詮かりそめのものであっ

　たということか。いつまで経っても、この世は鎮まらぬのう。キリがないわッ」

久秀「お屋形さま。ならば、大軍にて上洛し、義輝公、晴元公の度肝を抜き、われらに二

　度と逆らえぬよう脅してやりましょうぞ」

長逸「おおっ、それがよい。ションベン、チビらせてやろうぞ」

　　　長慶、そうした声を手で制し、静かな声を出す。

長慶「なれど、大軍を挙げ、王城の地へと入るには大義名分が必要であろう。帝のご宸襟

　を安んじ奉るとともに、京畿の人心を安んずるためにも……」

久秀「われらに、大義はございます。いまこそ、理世安民の旗印の出番かと」

長慶「おおっ、道理でもって世を治め、民心を安んずるという大義、理世安民の旗印を掲

　げて上洛すると申すか」

久秀「御意。すでに理世安民の旗幟、調えておりまする」

長慶「では、早速、兵を糾合せよ。上洛じゃ！」

久秀「して、動員する兵数はいかほどに？」

長慶「二万か、二万五千余でよい。すぐさま河内、和泉、摂津などの諸将に動員令を出

　すべし」

久秀「かしこまりました」

〇三好軍の進軍

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）七月

　　　三好長慶、大軍を率いて京の都をめざし進軍。

　　　その先頭にひるがえる「理世安民」の旗幟。

ナレーション「三好長慶は、芥川山城の攻撃を中止し、急遽、二万五千余の兵を率いて西

　の城、すなわち京都・西院城の救援に向かった。このとき、長慶は初めて「理世安民」

　の旗印を掲げて上洛の途に就いた。それは、将軍義輝に代わり、自らの力で天下静謐を

　めざすという長慶の大いなる志を世に示す大義の旗であった」

　　　馬上の総大将、三好長慶を先頭に、三好軍が徒歩で進軍している。そこへ、軍の後

　　　方から松永久秀が馬を走らせてくる。

久秀「お屋形さま、物見の兵が申すには、晴元公、すでに西の城の囲みを解き、東山の霊

　山城に逃げ上がったとのこと。われらの大軍を怖れてのことでございましょう」

長慶「いつもながら、逃げ足の早いことよ」

久秀「義輝公も北の船岡山に退かれたとの由」

長慶「ふふっ。どうせまた近江の朽木谷に逃げ込むのであろう」

久秀「和議を申し込んでおきながら、その和議を自ら破るとは、困った御仁にございます。

　これでは、まるで駄々っ子……」

長慶「うむ。困ったものよ。幕府の奉行衆や有力公家らが、義輝公に付き従い、近江へと

　落ち延びれば、またしても、まつりごとが混乱しよう。いかがしたものか」

久秀「では、幕臣らを京の都に足止めいたしましょう」

長慶「ほう。どのようにして足止めするというのじゃ」

　　　久秀、馬上の長慶に耳打ちする。長慶、呵々と笑う。

長慶「それはいい。名案じゃ」

ナレーション「久秀がこのとき長慶に提案したこと。それは、将軍義輝に付き従って近江

　へ避難した幕臣、廷臣らの知行を没収することであった。これにより、知行を失うこと

　を恐れた幕臣らは京に居残り、まつりごとは混乱することなく維持されたのである」

〇三好長慶、上洛

　　　三好軍、「理世安民」の旗を掲げて、洛中に入る。

　　　軍の先頭に三好長慶の騎馬姿。その後ろには、三好長逸、松永久秀が同じく騎馬で

　　　進む。長逸が背後から長慶に声をかける。

長逸「幕府軍のさしたる抵抗もなく、こうもやすやすと京の都に入れるとは……なれど張

　り合いのないことよ。して、とりあえず本陣はどこにおく」

　　　長逸の問いに、長慶が東山三十六峰の方角を指し示す。

　　　その東山には八坂の塔がそびえ立っている。

長慶「叔父御、本陣は法観寺がよろしいかと存ずるが、いかが。八坂の塔に、理世安民の

　旗幟を掲げ、わが志を世に示そうと思うてござる」

長逸「おおっ、それはよい。八坂の塔に掲げれば、だれの目にも入ろう。われらの大義を

　満天下に示すには、うってつけの場所よ。しかも、敵が立て籠る霊山城は、そこから目

　と鼻の先。法観寺を本陣にして、霊山城を攻め立てようぞ」

長慶「久秀、聞いたか。さて、霊山城はだれに攻めさせればよいであろうか」

久秀「はッ。それなら、東山辺りの地理に詳しい今村どのが適任かと」

長康「細川氏綱さまのご家来衆、今村慶満どのか。よかろう」

久秀「今村どのの軍にわが鉄砲隊を加えれば、鎧袖一触で落とせましょう」

長慶「うむ」

〇東山・八坂の塔（法観寺五重塔）

　　　◎テロップ

　　　京都・八坂の塔

　　　八坂の塔に翻る理世安民の旗幟。

　　　その八坂の塔の上から、甲冑姿の三好長慶、小手をかざして霊山城の攻防を見守る。

ナレーション「かくして天文二十二年八月一日、八坂の塔に理世安民の旗幟が高々と翻っ

　た。長慶の大軍が霊山城に迫るや、将軍義輝と細川晴元の主従は、丹波から近江へと落

　ち延び、義輝は再び朽木谷の岩神館を仮御所とした。義輝はこのときから五年間、ここ

　朽木谷に身を潜めることになる」

〇東山・霊山城の攻防

　　　◎テロップ

　　　東山・霊山城

　　　鉄砲の凄まじい轟音、敵味方の喊声。

　　　今村慶満率いる三好の軍勢が、喚きながら霊山城に駆け上がる。

　　　霊山城の城将、松田監物これを迎え撃ち、奮戦す。

慶満「このような小城、一気にもみつぶせ。かかれ、かかれいッ」

　　　銃声、絶え間なく響き、霊山城内、大混乱に陥る。

　　　松田監物、大身槍の石突を地に打ち立て、兵を督励する。

監物「ええいッ、うろたえるでないッ。われら幕府軍の意地を敵に見せるのじゃ。者ども、

　死ねや、死ねッ」

　　　再び、鉄砲の一斉射撃音。

　　　監物の周りで、城兵が次々に倒れ伏す。

家臣「監物さま、もはやいきませぬ。お逃げくだされッ」

監物「馬鹿を申せ。逃げるなど論外。敵の大軍を向こうに回し、死ぬること、一軍の将と

　して一世の誉れなり！」

　　　その瞬間、銃声がして、弾丸が監物の胸に命中する。

監物「ううっ、無念」

　　　地に膝をついて崩れる監物。

家臣「監物さま！」

　　　直後、霊山城、炎に包まれる。

ナレーション「霊山城を陥落させ、京の都を制圧した三好長慶は、返す刀で摂津・芥川山

　城に転進し、裏切者である芥川孫十郎の成敗に取りかかった」

〇摂津・芥川山城を囲む三好長慶の陣

　　　三好軍の三階菱に釘抜紋の旗が、芥川山の麓に無数にはためくが、動く気配がない。

　　　城主の芥川孫十郎、それを怪訝な目で見おろし、家臣につぶやく。

　　　◎テロップ

　　　芥川孫十郎

孫十郎「何故、城を囲むだけで攻めてこぬ。何故じゃ」

家臣「兵糧攻めでございましょうか」

孫十郎「違う。前回とは異なる雲霞のごとき大軍での布陣。あのような大軍勢であれば、

　この城なんぞ力攻めで一気呵成に落とせるはず。わからぬ。何故に攻めてこぬ」

〇芥川山城を攻囲する三好長慶本陣

　　　◎テロップ

　　　三好軍本陣

　　　本陣幔幕内で、三好長慶、三好長逸、松永久秀ら重臣が、小具足姿で軍議を凝らす。

　　　幔幕や、風にひるがえる旗幟に三階菱に釘抜の定紋。旗指物が無数に揺れる。

ナレーション「三好軍が芥川山城を取り囲んで、すでに三日が経過していた。蟻一匹通さ

　ぬ鉄壁の布陣であり、四方から総攻撃すれば城は容易に陥落するはずであった。だが、

　三好長慶が、なぜか攻撃の命を下さない」

久秀「お屋形さま。要害の山城とはいえ、たかが小城。前回と異なり、此度は大軍。一気

　にもみつぶしましょうぞ。この弾正に、先鋒をお命じ下され」

長慶「………」

　　　長慶、無言。腕を組んで瞑目するのみ。

　　　その長慶（通称孫次郎）に、三好長逸が問う。

長逸「孫次郎、もはや将軍義輝公は近江に落ち延び、この芥川山城は援軍なき孤城となっ

　ておる。急がずとも、兵糧攻めで落とせようが、それでは士気にかかわる。やはり、弾

　正の申すように、総攻撃で落とすがよいと考えるが……」

長慶「叔父御。孫十郎は、わが一族の者であり、しかも義弟。命をとるのは、しのびない」

長逸「ふむ、義理の舎弟とはいえ、あのような卑怯な裏切者に対して、なんと寛大なこと

　よ。お主はこれまで義輝公を殺めぬどころか、父の仇である晴元公の命すらとらぬ。仏

　心も過ぎると、敵になめられようぞ」

久秀「お屋形さま。日向守さまの申されるとおりにございます。いますぐ四方から攻め立

　てましょうぞ」

長慶「ならぬ。まずは開城を申し入れよ」

久秀「和議にございますか」

長慶「うむ。孫十郎を許し、身柄を阿波三好家に預けることとする。その旨、孫十郎に伝

　えるがよい」

久秀「はッ」

　　　久秀、不服そうに眉をしかめる。

　　　長逸も呆れたような表情で、頭を掻く。

ナレーション「しかし、猜疑心の強い芥川孫十郎は、長慶の温情を騙し討ちにするつもり

　かと疑い、開城をずるずると先延ばしにしたが、やがて兵粮が尽き、降伏した」

〇摂津・芥川山城の井楼櫓

　　　◎テロップ

　　　天文二十二年（一五五三）八月下旬

　　　摂津・芥川山城

　　　海抜一八〇メートルの山上に築かれた芥川山城の井楼櫓の上に、三好長慶と松永久

　　　秀の主従が肩を並べ、眼下の景色を眺望する。

　　　井楼櫓に「理世安民」の旗幟が翻る。

　　　二人の眼下には、摂津高槻の沃野が広がり、京の都へと至る西国街道が走る。

久秀「お屋形さま。ここは聞きしにまさる要害の地。京の都にも近く、天下を睥睨するに

　は適地かと存じます」

長慶「うむ。たしかに越水城は京の都から遠く、芥川山城より地の利が悪い」

久秀「いっそ、越水からこの城に移られては、いかがでございましょう」

長慶「そのためには、山城に過ぎぬこの城を、一から整備し直さねばならぬ。なかなか骨

　の折れることよ」

久秀「この弾正にお任せあれ。いまやお屋形さまは、押しも押されもせぬ天下人。天下人

　にふさわしい天下城をつくってみせましょうぞ」

ナレーション「以降、芥川山城は、群郭式の大規模な山城として整備された。三好長慶は

　この芥川山城を拠点に、将軍ぬきで畿内を実効支配する独自政権、すなわち三好政権を

　樹立した。ときに長慶三十二歳。理世安民の旗印を掲げて進む、天下人の姿がそこにあ

　った。天下のまつりごとの中心地となった芥川山は、のちに三好山と称された」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一日放映分（40分）終わり

※大河ドラマ脚本②「龍の時代」勝瑞事件編につづく。